

# 『万葉集』の翻訳における テキストと訓義をめぐる問題点

大谷 歩

## 1 はじめに

第5回万葉文化館主宰共同研究「海外における記紀万葉の受容に関する比較研究—翻訳にあらわれる日本文学の特色について—」では、国内外の日本文学研究者・外国文学研究者により、『万葉集』を中心とした古代日本文学が翻訳される時に生じる諸問題について検討を重ねてきた。『万葉集』がどのように海外で研究されているかに不案内な筆者にとっては、新鮮な発見と驚きの多い共同研究であった。殊のほか、〈翻訳〉とはある言語を別の言語に置き換えることだけではなく、漢字表記のみの『万葉集』を漢字仮名交じりの和文に書き下し、それを現代の言葉に置き換えることもまた〈翻訳〉であるということに気付かされた。この〈翻訳〉とは、他言語間の言葉の置換のみならず、古代の言葉を現代の言葉にすることも包含するものであり、その意味で古代日本の文学を研究する我々もまた、古代文学の翻訳者であるということなのであろう。

今回の共同研究で、筆者は日本の古代文学研究の立場から、写本・版本・注釈書にわたる様々な『万葉集』のテキストの日本における位置を確認し、また『万葉集』がはじめて翻訳された19世紀において、いずれのテキストが外国人翻訳者たちの手に渡った可能性が高いのかを検討した。本稿で述べることは、『万葉集』研究者にとっては知られた内容ではあるのだが、『万葉集』の翻訳本を研究しようとする『万葉集』の専門家以外の研究者にとって、翻訳された『万葉集』の底本を明らかにする一助となればと願う次第である。さらに、平成28年10月2日(日)におこなわれた、当該共同研究の成果発表である第13回万葉古代学公開シンポジウムのディスカッションで取り上げた歌を検討し、万葉歌を〈翻訳〉するという視点から、〈翻訳〉の際に生じる問題の一例として論じてみたい。

## 2 底本の中の『万葉集』

文学作品が海外の言語で翻訳される際には、何らかのテキストに基づいて翻訳がなされるのを必定とする。特に古典作品においては、その元となるテキストがその国の中で、どのような位置付けにあるのかを確認する必要がある。古代日本の文献である『万葉集』においても、それがどのような位置付けにあるテキストであるのかを確認するのが基本の作業となる。その基本となるテキストを「底本」と呼んでいる。まず、「底本」とは何かということを辞書的に理解すると、次のようになる。

### a 『日本古典籍書誌学辞典』「底本・そこほん」の項

「ていほん」とも言うが、「定本」と混同しないように「そこほん」と言う場合が多い。すでに典籍として成立しているものを別の形にする場合の元の本のこと。写本を版本にしたり、写本や版本を活字本にしたりする場合、その元になった本、もしくは本文を言う。現在、写本や版本を活字化する場合は、その凡例に「××本を底本にした」とか、「底本に××本を用い、忠実に活字化した」などと記するのが一般的であるが、江戸時代の古活字本や整版本の場合は、そのように記すことがないので、どの本を底本にしたのかわからない。漢籍では藍本という。(片桐洋一)<sup>1)</sup>

b 『日本国語大辞典』第2版「底本・ていほん」の項（第3項の抜粋）

翻訳・翻字などの際、拠りどころとする本。また、古典の異本を校合する際などに、基準として採用する本。もととする本。そこほん。<sup>(2)</sup>

「底本」とは、古典作品などを活字にする際の基盤とする本、あるいは翻訳する際に拠りどころとする本、ということである。翻訳本の場合は、この「底本」がいずれのテキストであるのかによって、翻訳者の誤訳であるか否かの前に、元とした本文の性格である場合があるということを考慮する必要が生じるのである。

日本最古の歌集である『万葉集』は、その原本は現存せず、写本によって書き伝えられ、現在に至っている。【図表1】の『万葉集』の主要な伝本<sup>(3)</sup>では、万葉集の主要な写本、伝本の簡単な解説を一覧表にしたものであるが、『万葉集』にはここに載らない多くの写本や断簡（もとは一巻・一冊であった古典籍が切斷されたもの。「切（裂）」や「古筆切」ともいう）が存する。『万葉集』の最古の写本は桂本万葉集であり、伝紀貫之筆とされる平安中期の写本である。江戸時代の出版技術の発展によって版本が出版されるまでは、『万葉集』の本文は写本によって書き伝えられてきたのは周知のことである<sup>(4)</sup>。

【図表1】『万葉集』の主要な伝本

	書名	年代	書写者・刊行者	巻数・歌数	特徴
写本					
次点本					
1	桂本	平安中期	紀貫之説 (ほか諸説あり)	巻4の109首 〈断簡あり〉	現存最古の写本。桂宮家旧蔵による名称。 断簡は梅尾切(とがのおぎれ)という。
2	藍紙本	平安中期	藤原公任説 藤原伊房説	巻9の119首 〈断簡あり〉	元暦校本と同系統の本文。 薄藍色の料紙を用いていることからの名称。
3	元暦校本	平安中期	寄合書	巻1・2・4・6・7・9・ 10・12・13・14・17～ 20(2600余首) 〈断簡あり〉	黒・朱・赭・緑による校合書入れがある。古い時代の写本の中でも、歌数の多いことから貴重。書写は11世紀後半。巻20の元暦元年の奥書からの名称。
4	金沢本	平安後期	藤原定信説 (ほか諸説あり)	巻2・4の208首	金沢前田家旧蔵による名称。
5	天治本	平安後期	藤原基俊説	巻13全歌(127首) 〈断簡あり〉	仙覚本の底本系統。系統の明らかな写本のうちの最古本。 天治元年の奥書による名称。
6	尼崎本	平安中期 鎌倉初期	源俊頼説	巻16全歌(101首) 〈断簡あり〉	仙覚本以前の巻16の現存最古の写本。巻12の断簡も存する。 万葉文化館に断簡1葉所蔵。
7	類聚古集	平安末期	藤原敦隆編	3800余首 (重出を含む)	万葉歌を題材や歌体で分類して編纂したもの(=類聚)。次点本中、最多の歌数。もとは全20巻揃っていた。
8	嘉暦伝承本	鎌倉初期 鎌倉中期		巻11の472首	仙覚本以前の巻11の現存最古写本。定家仮名遣いによる訓。嘉暦三年伝授の奥書による名称。
9	伝壬生隆祐筆本	鎌倉中期	壬生隆祐説	巻9の85首	仙覚本の底本系統。浅倉景順の極書による名称。
10	古葉略類聚鈔	鎌倉初期	中臣祐定編	1900余首 (重出を含む)	中臣祐定が春日本をもとに分類・編纂したと目される。
11	春日本	鎌倉中期	中臣祐定説	巻5～10・13・14・ 17・19・20の残簡 380首以上	歌会に使用した懐紙の裏に書写され、冊子本にしたものの残簡。春日大社神官の祐定の奥書による名称。
12	伝冷泉為頼筆本	室町時代	冷泉為頼説	巻1の83首	長歌の訓は漢字本文の右傍に片仮名で、短歌は別行に記す。
13	広瀬本	江戸中期		全巻 (巻10の後半約370首欠)	冷泉家本系統の本文。書写年代は江戸だが、本文は非仙覚本系統で、全巻揃うことから貴重。

新点本					
14	紀州本	鎌倉末期 室町末期	寄合書	全巻	巻1～10は次点本系で鎌倉末期書写、巻11～20は新点本系で室町末期書写。神田本とも呼ばれる。
15	西本願寺本	鎌倉後期	寄合書	全巻	全巻揃う現存最古の写本(完本)で、仙覚本系の最古本。漢字本文の傍に片仮名の訓を色分けして付す(黒は古点・次点、朱は新点、青は仙覚の改訓)。
16	金沢文庫本	室町初期	飛鳥井雅正 尊円法親王	巻1・9・19(断簡あり)	仙覚文永本系統の本。金沢文庫所蔵と伝えられることによる名称。万葉文化館に断簡1葉所蔵。
17	神宮文庫本	室町後期		全巻	仙覚寛元本系統の本。神宮文庫所蔵による名称。
18	細井本	室町末期 江戸初期		全巻 (巻3の約100首重出、 巻4の約270首欠)	巻4～6は室町末期。その他の巻は江戸初期書写。巻4～6は非仙覚本系。その他の巻は神宮文庫系。
19	陽明本	室町末期	寄合書	全巻 (巻10の約150首欠)	仙覚文永本系統の本。
20	大矢本	室町末期		全巻	仙覚文永3年本系統。巻7の錯簡状況を明らかにする本文を持つ。仙覚本の様相をよく伝え貴重。
21	温故堂本	室町末期		全巻	陽明本を書写。温故堂塙保己一旧蔵による名称。
22	京都大学本	江戸初期	数人筆	全巻	仙覚文永本系で、中院本の一伝本。漢字本文を黒、注記を朱、仙覚改訓を紺青、禁裏御本校合を代赭、紀州本校合を藍青で書き分ける。
版本					
23	活字無訓本	江戸初期		全巻(10冊) (巻3後半重出、 巻4の後半欠)	万葉集の最初の版本。漢字本文のみで訓は無い。本文は細井本系統の林道春校本(新点本系統)による。
24	活字附訓本	江戸初期		全巻(10冊)	底本は活字無訓本。大矢本系統の本で校合し、訓を付す。
25	寛永版本	寛永20年 (1643)	洛陽三条寺町 誓願寺前 安田十兵衛	全巻	「万葉和歌集」と題される。活字附訓本の整版本。出版以降、もともと流布した万葉集テキスト。通行本とも。
26	宝永版本	宝永6年 (1709)	御書物屋 出雲寺和泉掾	全巻	寛永版本の刊記を改めて刊行。版面は寛永版本と同じ。
27	旁(傍)注本	寛政元年 (1789)	御書物屋 出雲寺和泉掾	全巻	本文は寛永版本の改訂。恵岳が旁注を加える。
28	校異本	文化2年 (1805)	橘経亮校訂	全巻	旁注本の注を削り、頭注に校異を記す。

『万葉集』の写本は、研究史上、訓読の歴史によって3つの時代に区分されており、それを「古点」、「次点」、「新点」と呼んでいる。殊に、鎌倉時代の僧・仙覚の訓点成果が重視され、仙覚の施した訓読の前の時代の写本(次点本)か、後の時代の写本(新点本)かで大きく区別される。訓点とは訓読の意であり、漢字でのみ記された『万葉集』をどのように和語として訓読するかという問題は、すでに平安時代には生じていたようである。

古点は、天暦5(951)年、村上天皇の詔で、梨壺の五人と呼ばれる大中臣能宣・源順・清原元輔・紀時文・坂上望城が付した訓のことを指す。この古点を記した原本は現存しておらず、後世の写本の一部に、その訓読を断片的にみることができるといふ状況である。後述する西本願寺本の、朱色の合点の無い黒色の字の訓読などがその例である。

次点は、時代的には古点以降、仙覚の新点までの訓のことを指す。主に平安時代から鎌倉時代初期の古い時代の写本が多いのが特徴である。これらの写本を次点本と称し、現存する『万葉集』の写本はこ

の次点本以降のものとなる。

新点は、次点本で訓が付されなかった歌に仙覚が付した訓であり、仙覚みずからが「新点」と名付けている。仙覚以降の写本はこの系統に属するものが多く、仙覚の新点によって、現存する『万葉集』全二十巻すべての万葉歌に訓が付されたことになり、仙覚の訓点成果が『万葉集』研究にもたらした意義は非常に大きい。仙覚の訓点成果が反映された写本を新点本、もしくは仙覚本系とも呼び慣わしている。その代表的な写本が西本願寺本であり、新点本の写本は、西本願寺本が成立した鎌倉後期以降のものである。

仙覚は無訓であった歌に訓を付しただけではなく、多くの諸本と校合して、それまでの訓読を改めるという作業も行っている。西本願寺本の漢字本文の右脇に書かれている訓読は、黒色の字は古点・次点の訓読、朱色の字は新点、青色の字は仙覚が改めた訓読というように、色によってどの時点の訓読かが示されているのも特徴であり、『万葉集』の写本研究では重視されるものである。

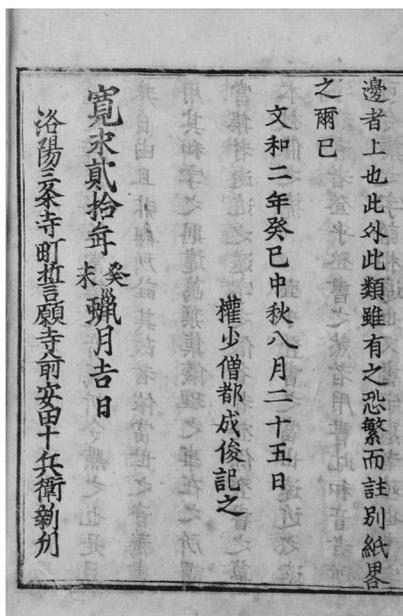
この西本願寺本以降は、全二十巻が揃った写本が多く登場する。写本は江戸時代に入っても書き伝えられ続けるのであるが、江戸初期には印刷技術が発達し、『万葉集』のテキストも出版物として刊行される時代を迎える。写本のように手書きではなく、印刷されたテキストのことを「版本」という。この版本には大きく2種類あり、「古活字本」と「整版本」と呼ばれる。古活字本は、一文字および数文字単位の活字を組み合わせて印刷するものであり、活字の再利用が可能なことから費用は安く済むが、一度組版を解体してしまうと再版に手間がかかるという弱点がある。そのため、整版本の流行により、古活字本の歴史は約50年ほどで幕を閉じることになった。この古活字版にあたるのが、活字無訓本と活字附訓本である。

もう一方の整版本は、文字などが彫刻された一枚板の版木を原版として刷る方法で、字数や行数を整えた清書を板に彫って原版とする、江戸期の主流な印刷方法である。この整版本にあたるのが、寛永版本以降の版本である。

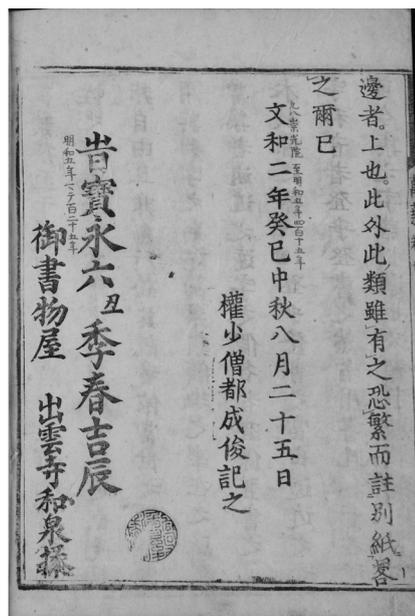
その江戸期の版本で最も重要なのが、寛永版本である。寛永20(1643)年に出版されたことから、寛永二十年版本とも呼ばれる。この寛永版本は、「万葉和歌集」という題箋が付されているが、本文は活字附訓本を元とした『万葉集』である。この寛永版本は後に版木が他の本屋に渡り、新たに出版されることになった。それが宝永版本であり、

宝永6(1709)年に出版されたことから、宝永六年版本とも呼ばれる。

したがって、寛永版本と宝永版本は同じ版木を使用していることから、出版元が異なる同じ本ということになる。印刷の際の摩擦によって、宝永版本の方が刷りの状態の良くないも



【図表2】寛永版本刊記 (万葉文化館蔵)



宝永版本刊記 (万葉文化館蔵)

のが多く見受けられる。この寛永版本と宝永版本の両者の刊記を【図表2】に掲出した。寛永版本の刊記には「安田十兵衛」が出版元であることが示され、その版木が「出雲寺和泉掾」へ渡り、宝永版本として再出版されたという事情を見て取ることができる。

この寛永版本・宝永版本は、江戸時代を席卷した『万葉集』のテキストで、出版以降、明治・大正・昭和の途中まで、最も流布した『万葉集』であるといえる。この寛永・宝永版本は、西本願寺本やその他の諸本と比較すると、誤字や誤読が散見されるのであるが、江戸国学における『万葉集』研究の進展に大きな役割を果たしたことも事実であろう。

以上、概説的な内容ではあるが、『万葉集』の写本・版本の流れを確認した。次に、『万葉集』の歴史と切っても切れないのが、注釈の歴史である。【図表3】<sup>6)</sup>は、『万葉集』の明治以前の主要な注釈書を一覧表で掲げたものであるが、これはごく一部である。江戸中期以降、契沖や賀茂真淵が『万葉集』研究を牽引し、注釈書の数は一挙に増加する。その江戸時代の『万葉集』注釈の先駆的な仕事が、北村季吟の『万葉拾穂抄』による初の全歌注釈であり、僧・契沖による『万葉代匠記』である。特に『万葉代匠記』は初稿本と精撰本とがあり、両者の内容には大きな差が認められる。

『万葉代匠記』は、水戸徳川家の命によって、契沖が下河辺長流の後を引き継いで執筆した全歌注釈である。特に精撰本は、日本の古典文学作品のみならず、漢籍・仏典など、多岐にわたる出典や新たな解釈を提示しており、『万葉集』研究では必読の書である。

江戸の国学者の『万葉集』研究ブームに火を付けたのは、この契沖と、『万葉考』を記した賀茂真淵の仕事であるといえよう。真淵は門下生が多く、以後多くの注釈書が出版される。それらの注釈書の中でも最も流布したのが、橘千蔭『万葉集略解』であろう。『万葉集略解』は、契沖・賀茂真淵・本居宣長などの諸説を多く指摘し、彼らの説を取り入れながら解釈をまとめているのが特徴である。また出版された量も多いことから、江戸で最も流布した注釈書であるといえる。

【図表3】『万葉集』の明治以前の主要な注釈書(古注釈)

	書名	著者	成立年代	特徴
1	秘府本万葉集抄	藤原盛方か	平安末期	万葉集最初の注釈書。全巻から173首を抄出。簡易な語釈。
2	万葉集註釈 (仙覚抄)	仙覚	文永6年 (1269)	全巻から947首を抄出。抄出注だが、詳細な考証で評価は高い。散逸した風土記を引用するなど、文献学的価値も高い。
3	万葉集管見	下河辺長流	寛文年間 (1661～73)	全巻から重要語句を抄出。契沖の『万葉代匠記』に影響。
4	万葉拾穂抄	北村季吟	貞享3年 (1686)	万葉集最初の全歌注釈。古来の説を集成。
5	万葉代匠記 (初稿本)		貞享4年 (1687)	水戸徳川家の依頼により、下河辺長流の後任として執筆。全歌注釈。
6	万葉代匠記 (精撰本)	契沖	元禄3年 (1690)	初稿本の本文を、水戸家より与えられた「四点本万葉集」などで校訂し、注釈もより精緻になる。和書・漢籍・仏典など、多岐にわたる出典を指摘。万葉集研究では必読の書。
7	万葉集僻案抄	荷田春満	享保年間 (1716～35)	巻1の全歌注釈。問答形式の注。

8	万葉集童蒙抄	荷田春満(講) 荷田信名(記)	享保10年頃 (1725)	巻2～17までの注釈。
9	万葉集割記	荷田春満(講) 荷田信名(記)	元文年間 (1736～41)	巻18～20の注釈。
10	万葉考	賀茂真淵	宝暦10年(1760) 完成/明和5年 (1768)刊行	巻1・2・11～14の全歌と別記からなる。真淵の没後、 狛諸成らが巻3～10・15～20を補訂。 契沖と並び、多くの国学者に影響を与える。
11	万葉集玉乃小琴	本居宣長	安永8年 (1779)	巻1～4の摘注。宣長の万葉集注釈としてまとまった 唯一の書。
12	万葉集略解	橘(加藤)千蔭	寛政8年 (1796)	全歌注釈。契沖・真淵・宣長などの諸説を多く指摘。 江戸期の注釈で最も流布した書。
13	万葉集燈	富士谷御杖	文政5年 (1822)	巻1の全歌注釈5冊と、巻2の注釈の一部2冊が残る。 神道の信仰や考え方に基づいて解説。
14	万葉集攷証	岸本由豆流	文政11年 (1828)	巻1～6までの全歌注釈。15巻7冊。 漢籍を多く引用し、詳細な考証がなされる。
15	万葉集古義	鹿持雅澄	天保10年 (1839)	全歌注釈。本編95冊、総論・各論研究46冊の大著。 雅澄に至るまでの万葉集研究の集大成。安政年間初頭 (1854頃)まで推敲。
16	万葉集檜嬌手 (万葉集檜楓)	橘守部	嘉永元年 (1848)	巻1～3(379番歌)までの全歌注釈。 全7冊で未完。

では、これらの注釈書の底本には何が使用されたのかという問題になるのであるが、今回の調査で明らかになったのは、次の三書である。北村季吟『万葉拾穂抄』の初稿では流布本である寛永版本が用いられ、改訂稿では冷泉家所蔵の妙寿院本が用いられたということ<sup>6)</sup>、契沖の『万葉代匠記』初稿本は寛永版本を用い、精撰本では四点本万葉集などと校合したこと<sup>7)</sup>、さらに岸本由豆流の『万葉集攷証』では、校異本万葉集が使用されたようである<sup>8)</sup>、ということである。これらはいずれも各書の解説などに依拠したものであり、本来は各注釈書の万葉歌の本文や訓読と、さまざまな『万葉集』テキストの本文・訓読を比較検討した上で発言しなければならないところである。その他の古注釈の底本についても同様であり、江戸期の注釈書の底本を明らかにするという作業は、それぞれの注釈書と各テキストを付き合わせて、どのテキストが底本として用いられたのかを検討しなければならない。ただ、江戸期の注釈の段階では、底本に忠実に従って解釈しようという風潮ではなく、歌の意味が通らないために漢字本文を改めたり、訓読を独自に改めることが多く行われていることから、現代でいうところの「底本」という概念は稀薄であったのではないと思われる。

では、江戸の国学者たちはどのテキストに基づいて『万葉集』を学んでいたのか、ということになる。おそらく寛永版本であろうということは推測されるのであるが、確認のために、『校本万葉集』や佐佐木信綱『万葉集事典』を参照し、江戸国学者の書入れ本万葉集の一覧を作成した。ここで取り上げている書入れ本とは、江戸国学者たちが歌に注を付したり、自説を書き込んでいる『万葉集』の版本のことである。つまり、国学者たちがどのテキストを見て『万葉集』を学んでいたかがわかる資料ということになる<sup>9)</sup>。

〈書入れ本万葉集一覧〉

1	正保4(1647)年	三宅正堅書入れ本	〈寛永版本〉
2	天和2(1682)年	清水宗川改訂万葉集	〈寛永版本〉
3	延宝6(1678)年	水戸飛鳥井本万葉集	〈活字無訓本〉 ※諸本校合
4	書入れ年代不明	下河辺長流手沢契沖書入れ本	〈寛永版本〉 ※巻11・12
5	元禄13(1700)年	今井似閑書入れ本	〈寛永版本〉
6	元禄13(1700)年	契沖書入れ本	〈寛永版本〉
7	書入れ年代不明	新井白石書入れ本	〈寛永版本〉
8	寛保2(1742)年	谷川士清書入れ本	〈宝永版本〉
9	宝暦11(1761)年	賀茂真淵手沢本	〈寛永版本〉
10	書入れ年代不明	田藩文庫本万葉和歌集	〈宝永版本〉 ※真淵書入れ
11	宝暦12(1762)年	村田春道書入れ本	〈寛永版本〉
12	天明4(1784)年	狛諸成諸入れ本	〈活字無訓本〉
13	書入れ年代不明	山岡明阿書入れ本	〈寛永版本〉
14	享和3(1803)年	関谷潜書入れ本	〈寛永版本〉
15	文化元(1804)年	孟彦手沢本	〈活字附訓本〉
16	天明元(1781)年 ～天明7(1787)年	橋経亮奥書本	〈宝永版本〉
17	天明5(1785)年	下田本万葉和歌集	〈宝永版本〉
18	書入れ年代不明	村田春海書入れ本	〈寛永版本〉
19	天明元(1781)年 ～文化11(1814)年	大平書入れ本	〈寛永版本〉
20	文化9(1812)年	小栗広伴書入れ本	〈宝永版本〉
21	書入れ年代不明	橋守部書入れ本	〈校異本〉
22	元治元(1864)年	木村正辞校本万葉集	〈宝永版本〉 ※諸本校合

上記の一覧はあくまでもサンプルであり、書入れ本万葉集は他にも多数存在するわけだが、おおよその状況は把握できるものと思われる。一見してわかるとおり、多くが寛永版本・宝永版本であり、一部に古活字本がみられる。江戸初期の活字本である古活字本の流通はまったく断絶したのではなく、寛永・宝永版本が主流になってからも使用されていたことがわかる。この寛永版本一強の時代は非常に長く続き、【図表4】の明治以降の注釈書の底本の状況をも、それは明らかである。

【図表4】 明治以降の主要な注釈書の底本

出版年	著者・編者校注者	書名	出版社	底本
1928 - 1929	井上通泰	『万葉集新考』1～8	国民図書	寛永版本
1928 - 1937	山田孝雄	『万葉集講義』1～3	宝文館	寛永版本
1930 - 1935	鴻巣盛広	『万葉集全釈』1～6	広文堂	寛永版本
1935 - 1936	各巻別担当者	『万葉集総釈』1～12	楽浪書院	寛永版本
1935 - 1945	金子元臣	『万葉集評釈』1～4	明治書院	寛永版本

1940 - 1948	佐佐木信綱 武田祐吉	『定本万葉集』1～5	岩波書店	西本願寺本
〈初版〉1943 - 1952 〈全集〉1966 - 1967	窪田空穂	『万葉集評釈』1～7 (『窪田空穂全集』13～19)	〈初版〉東京堂出版 〈全集〉角川書店	寛永版本
1947 - 1955	佐伯梅友・藤森朋夫・ 石井庄司 校注	日本古典全書『万葉集』1～5	朝日新聞社	寛永版本
〈初版〉1948 - 1951 〈増訂〉1956 - 1957	武田祐吉	『増訂 万葉集全註釈』1～14	〈初版〉改造社 〈増訂〉角川書店	定本万葉集 (底本：西本願寺本)
1948 - 1954年	佐佐木信綱	『評釈万葉集』1～7 (『佐佐木信綱全集』1～9)	六興出版部	寛永版本か
〈初版〉1949 - 1956 〈新装版〉1982 - 1983	土屋文明	『万葉集私注』1～10	筑摩書房	通行本 (※寛永版本)
1957 - 1962年	高木市之助・大野晋・ 五味智英 校注	日本古典文学大系『万葉集』 1～4	岩波書店	西本願寺本
〈初版〉1957 - 1977 〈普及版〉1982 - 1984	澤瀉久孝	『万葉集注釈』1～20 本文篇・索引篇	中央公論社	寛永版本 古写本
1971 - 1975	小島憲之・木下正俊・ 佐竹昭広 校注	日本古典文学全集『万葉集』 1～4	小学館	西本願寺本
1978 - 1983	中西進	『万葉集 全訳注原文付』1～4	講談社文庫	西本願寺本
1983 - 2006	各巻別担当者	『万葉集全注』1～15・17～20	有斐閣	西本願寺本
1994 - 1996	小島憲之・木下正俊・ 東野治之 校注	新編日本古典文学全集『万葉集』 1～4	小学館	西本願寺本
1995 - 2000	伊藤博	『万葉集釈注』1～11 原文篇・索引篇	集英社	西本願寺本
1997 - 2015	久保田淳監修 稲岡耕二著	和歌文学大系『万葉集』 1～4	明治書院	西本願寺本
1999 - 2003	大谷雅夫・工藤力男・ 佐竹昭広・山崎福之・ 山田英雄 校注	新日本古典文学大系『万葉集』 1～4	岩波書店	西本願寺本
2006 - 2015	阿蘇瑞枝	『万葉集全歌講義』1～10	笠間書院	西本願寺本
2009 - 2010	多田一臣	『万葉集全解』1～7	筑摩書房	西本願寺本

【図表4】は、いわゆる現代注釈と呼ばれる注釈書が、何を底本としていたかを示したものである。昭和初期の井上通泰『万葉集新考』以降、寛永版本の使用が長く続き、早くは『定本万葉集』が底本に西本願寺本を採用している。寛永版本に誤字や誤読の多いことは先に述べたとおりであり、注釈書の底本として多くの問題が生じたであろうことは想像に難くない。また、『万葉集』の本文や訓読の研究が進み、いかにして『万葉集』成立当時の本文と訓みに近づけるかを考察し、その上で歌を解釈することに力が注がれるようになったという時代的な要請もあろう。したがって、多くの誤字を抱える寛永版本よりも、むしろ全二十巻を備える最も古い写本である西本願寺本が、底本としてふさわしいと判断され、現在出版されているほぼすべての『万葉集』で、西本願寺本が底本とされるようになったものと思われる。ただし、西本願寺本を底本としながらも、多くの注釈書は諸写本によって底本を校訂しているため、注意が必要

である。

これまでの検討をまとめると、西本願寺本が底本として採用されるまでは、江戸時代に出版された寛永版本・宝永版本が最も流布した『万葉集』であり、多くの注釈書の底本となったものと考えられる。ここで、外国語に翻訳するという問題を考慮すれば、『万葉集』がはじめて翻訳された19世紀の『万葉集』の国内の流通状況からみると、寛永版本・宝永版本の可能性が高いであろう。しかし、漢字本文と訓読だけの寛永版本が利用された可能性がどれほどあるのか、いささか疑問は残る。むしろ、注釈や訳文の無い『万葉集』テキストから直接訳出するよりも、語釈や注の付されている注釈書が利用されたのではないかと推測される。したがって、江戸後期から明治期にかけて、もっとも参照された可能性が高いのは、『万葉集略解』ではなかっただろうか。国内での版本の流通量も多く、明治以降、早い段階で洋書本に装丁されて出版されたのも『万葉集略解』である。筆者は他言語に翻訳された『万葉集』の翻訳本の底本の一つ一つを調査する力はないが、『万葉集』翻訳の黎明期である19世紀の状況から、右のようにある程度底本の候補を絞り込むことは可能であろう。なお、最初期の『万葉集』の翻訳および研究状況については、本誌の小倉久美子氏の論文を参照されたい。

### 3 「神家武毛」の訓義と〈翻訳〉の問題点の一事例

今回の公開シンポジウムでは、『万葉集』から具体的な一首を取り上げ、各言語からの視点と、写本の訓読・注釈書における現代語訳などの日本国内の理解とを交え、ディスカッションを行った。取り上げた歌は、『万葉集』巻4・522番歌である。522番歌は、四句目の「神家武毛」をめぐる訓読に諸説あり、その理解によって一首の解釈が大きく変わるものである。ディスカッションではこの点についても取り上げ、日本における歌の理解の違いによって、各言語における翻訳の在り方が変わってくる一例として取り上げた。ここでは、あらためて522番歌の訓読と解釈に触れ、その問題点を整理しておきたい。

京職、藤原大夫の相伴郎女に贈れる歌三首〔卿、諱を磨と曰へり〕

をとめ等が珠匣なる玉櫛の神さびけむも妹に逢はずあれば（巻4・522）

よく渡る人は年にもありとふを何時の間にそもわが恋ひにける（同・523）

むしぶすま柔やが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒しも（同・524）

京職、藤原大夫贈相伴郎女歌三首〔卿、諱曰磨也〕

媿媿等之 珠篋有 玉櫛乃 神家武毛 妹尔阿波受有者

好渡 人者年母 有云乎 何時間曾毛 吾恋尔来

蒸被 奈胡也我下丹 雖臥 与妹不宿者 肌之寒霜<sup>(10)</sup>

522番歌は、藤原麻呂が坂上郎女へ贈った三首のうちの一首目である。おとめたちが大切にしている玉匣にある玉櫛のように、という上三句を序として、久しく妹に逢わなかったことによって「神家武毛」という状態になったのだという。この「神家武毛」の主体を作者の藤原麻呂とするか、相手の坂上郎女とするかは、「神家武毛」をいかなる意味の言葉として捉えるかで、諸説入り乱れている状況である。この「神家武毛」の本文は諸本に異同がなく、いかに訓読するかが議論されてきた。訓読の諸説を挙げると、次のとおりである。

- ①めつらしけむも<sup>(ム)</sup> …………… 諸写本・拾穂抄  
 ②かみさひけむも<sup>(ツ)</sup><sup>(ム)</sup> …………… 代匠記（初稿本）・代匠記（精撰本）・万葉考・略解・全釈  
 ③かむさびけむも …………… 新訓・総釈・日本古典全書・日本古典文学大系・澤瀉注釈・窪田評釈・日本古典文学全集・私注・新潮日本古典集成・全注・講談社文庫・新編日本古典文学全集・釈注・和歌大系・新日本古典文学大系・全歌講義・全解  
 ④たましひけむも …………… 古義・井上新考・金子評釈  
 ⑤くすはしけむも<sup>(ハ)</sup> …………… 佐佐木評釈・武田全註釈

①「めつらしけむも」は諸写本異同はないが、契沖『万葉代匠記』初稿本は「神家武毛、これをはかみさひけんもとよむへき歟」、精撰本は「今按、第四ノ句ハカミサヒケムモト読ヘキニヤ」と別案を提示している<sup>(11)</sup>。後述するが、諸氏による検討が重ねられ、契沖以後は「かみさひけむも」や③「かむさびけむも」の訓が支持されるようになる。鹿持雅澄『万葉集古義』は今村楽説の④「たましひけむも」を採り、「神魂消むもの意なり、(中略)吾思ふ妹にあはずであれば、そのくるしさに、たましひ消入むとするよ、さてもくちをしき事哉となり」<sup>(12)</sup>と述べている。しかし、鴻巣盛広『万葉集全釈』に「神をタマシヒとよんだ例は他に無いから、従ひがたい」<sup>(13)</sup>と反対意見が提出されている。⑤「くすはしけむも」を採る佐佐木信綱『評釈万葉集』は、「をとめらの珠匣の中に大切にをしてをる玉櫛のやうに、奇しく珍らしくおもはれることであらう、長く妻に逢はずにをるので」<sup>(14)</sup>と現代語訳を付し、藤原麻呂の坂上郎女を讃える表現として捉えている。武田祐吉『増訂 万葉集全註釈』も「相手の女子を、神異に貴くあるならむの意」であるとして、下句を「あなたは神々しいことでしょう。あなたに逢わないでいるので」<sup>(15)</sup>と訳している。

契沖以降、多くの注釈書が支持する②③の「かむ(み)さびけむも」の「かむさび」は、『万葉集総釈』が「匣の中の櫛の垢がついて古くなつたのを譬へて、吾が妻の古くなつたことをいふ」<sup>(16)</sup>とするように、櫛の古びた様子を妹の様子に擬えたとする説や、窪田空穂『万葉集評釈』のように、

「神さぶ」は、本義は、神としての性質を発揮する意であるが、転じて、物の古びていることをあらわす語ともなっている。(中略)妹に逢わずにいれば、そのために老人らしくなる意で、碎いていえば爺むさくってしまったことだろうの意。これは磨としては甚だ誇張した言で、その誇張は、郎女を婉曲に讃えることであり、またさみしさを訴えることでもある。<sup>(17)</sup>

と、神々しいの意から転じて、ここでは麻呂自身が古びて老いたことを示す意であるという解釈も存する。日本古典全書本に「私は古びただらうな」<sup>(18)</sup>、日本古典文学大系本も「私は古いこんでいることであらう」<sup>(19)</sup>とするように、「かむさび」の対象は郎女ではなく麻呂自身のことを指すとする説が主流となる。一方、中西進『万葉集 全訳注 原文付』は「かむさび」を「神々しくなる。恋愛に不適な状態をいう」と言い、「少女らが美しい箱に大切にしているりっぱな櫛のように、私は尊く人間ばなれしてしまったらうか。あなたにお逢いしないので」<sup>(20)</sup>と現代語訳し、「かむさび」を老いではなく、自身の神々しい状態を指すとする。同様に、「かむさび」を古ぼけるや老いるの意ではなく、神々しいという讃美表現の意としながら、郎女を讃える表現とする説に小島恵子氏の論もある<sup>(21)</sup>。また、多田一臣『万葉集全解』の「女はもともと神の妻(神女・巫女)とされた。男との関係が断られると、神の女に戻る。ここは、長く逢わずにいたので、あなたはすっかり神の女になってしまったのではないか、と揶揄したもの。女を現実の恋の場に引き戻す挑発性がある」<sup>(22)</sup>との見解もあるが、当該歌にそのような原初的な女性の性格をみることができるとは疑問が残る。

以上の状況を整理すると、②③④⑤の訓読の諸説に加え、A (1)「かむさび」の対象を麻呂とする説、A (2) 坂上郎女とする説、B (1)「かむさび」の意味を神々しいとする説、B (2) 古ぼけた・老いるとする説のA (1) (2) とB (1) (2) の組み合わせによって、諸説が展開しているということになる<sup>(23)</sup>。

『万葉集』の「かむさび」についての検討は、森本健吉氏<sup>(24)</sup>や先の小島恵子氏の論に詳しいが、麻呂が自分のことを老いたとする「かむさび」の意で解釈する『万葉集全注』が「ただし、『神』一字をカムサビと読むことに多少疑問がある」<sup>(25)</sup>と述べるように、「神」一字をいかに訓読するかが、「かむさび」訓読説の最大の問題であるといえよう。

当該歌は、「をとめらがたまくしげなるたまくしの」と、「くし」の音を繰り返すところに特徴がある。この上句を序詞として捉えるならば、この重ねられた「くし」の音は、本旨である下句を導くためであると考えるのが自然である。「かむさび」は「神」という漢字に沿った訓みであるように思われるが、「神」一字で「かむさび」と訓む例は『万葉集』中ほかに無く、序詞との音の関係を考えるならば、必ずしも密接とは言いがたい。この「くし」の音に注目するならば、「わが国は 常世にならむ 凶負へる 神しき 亀も 新代と 泉の河に」(巻1・50)の例にみるように、「神家武毛」は「くすしきけむも」と訓む可能性も考えられるのではないだろうか。「くすしき」は、この巻1の例を含め、『万葉集』においては次のようにみられる。

A 藤原宮の役民の作れる歌

やすみしし わご大王 高照らす 日の皇子 荒栲の 藤原がうへに 食す国を 見し給はむ  
と 都宮は 高知らさむと 神ながら 思ほすなへに 天地も 寄りてあれこそ 石走る 淡  
海の国の 衣手の 田上山の 真木さく 檜の婦手を もののふの 八十氏河に 玉藻なす  
浮かべ流せれ 其を取ると さわく御民も 家忘れ 身もたな知らず 鴨じもの 水に浮き  
みて わが作る 日の御門に 知らぬ国 寄し巨勢道より わが国は 常世にならむ 凶負へる  
神しき亀も [神亀毛] 新代と 泉の河に 持ち越せる 真木の婦手を 百足らず 筏に作り  
沂すらむ 勤はく見れば 神ながらならし (巻1・50)

B 長田王の筑紫に遣はさえて水島に渡りし時の歌二首

聞くが如まこと 貴く奇しくも [奇母] 神さび居るかこれの水島 (巻3・245)

C 不尽山を詠める歌一首并せて短歌

なまよみの 甲斐の国 うち寄する 駿河の国と こちごちの 国のみ中ゆ 出で立てる 不  
尽の高嶺は 天雲も い行きはばかり 飛ぶ鳥も 飛びも上らず 燃ゆる火を 雪もち消ち  
降る雪を 火もち消ちつつ 言ひもえず 名づけも知らず 霊しくも [霊母] います神かも…  
(巻3・319 / 高橋虫麻呂歌集)

D 羈旅の歌一首并せて短歌

海若は 霊しきものか [霊寸物香] 淡路島 中に立て置きて 白波を 伊予に廻らし 座待月  
明石の門ゆは 夕されば 潮を満たしめ 明けされば 潮を干しむ… (巻3・388)

E 七夕の歌一首并せて短歌

…何しかも 秋にしあらねば 言問の 乏しき子ら うつせみの 世の人われも ここをしも

あやに奇しみ [安夜尢須之弥] ゆき変る 毎年ごとに 天の原 ふり放け見つつ 言ひ継ぎにすれ (巻18・4125 / 大伴家持)

Aの「図負へる 神しき亀」は、『尚書』洪範・孔安国伝に「神亀負文而出」<sup>(26)</sup>とあり、また『続日本紀』神亀6年8月には「京職大夫従三位藤原朝臣麻呂らい、図負へる亀一頭献らくと奏し賜ふに」<sup>(27)</sup>とあり、瑞祥として捉えられていた。神亀6年には、この瑞祥の亀があらわれたことによって、元号を「神亀」から「天平」に改めたとある。Bは、筑紫の水鳥の神々しい様子に対して、聞き及んでいたとおりの素晴らしい場所であった感動を詠んでいる。Cは、不尽の山の頂では燃える火を雪が消し、また降る雪をその火で消すといい、言いようも名付けようもないという山の神に対する畏敬と、不尽の山そのものの偉容を讚美している。Dは淡路島を中心とした周囲の美景を詠むもので、それは海神の神威であるのかという。Eは七夕伝説をテーマとして、秋の一夜にしか会うことのゆるされない牽牛・織女に思いを馳せ、そのような運命にある二人を不思議に思いながら、毎年天を仰いで語り継ぐのだという。

このように、人智の及ばない神や霊なるもの、あるいは伝説上の不可思議な事象に対して「くすし」が用いられるのであり、また「かも」や「か」に接続し、そのような状態であることに対する疑問、驚嘆を差し挟む表現であるともいえる。『万葉集』の「神・くすし」の用例は限られるものの、50番歌にみえる「神亀」は元号の神亀としても用いられていることから、当該歌の「神」を「くすし」と訓むことも十分に可能であったと推測される。

そもそも、おとめたちが持っている立派な匣に入っている美しい櫛を序とし、その櫛が古ぼけているにしても、神々しい様子であったにしても、意味のとおりにくい比喩であることには違いない。「妹に逢はずあれば」という本旨からすれば、これは麻呂が郎女のもとを長らく訪れなかったことに対する弁明の歌である。その弁明の方法は「吾妹子は常世の国に住みけらし昔見しより変若ちましにけり」(巻4・650 / 大伴三依)のように、相手の女性を大げさに持ち上げて褒め讃えるか、自分の落ちぶれた姿を詠んで相手の同情を誘うか、この二つの方法が考えられる。この「神家武毛」を「くすしきけむ」とするならば、妹に長らく逢っていないことによって「くすしきけむ」という状態になってしまったのだろうか、という驚きをこめた表現であるといえるであろう。それは長く会っていないにもかかわらず、郎女が変わらずに美しくあるであろうことと、それに対比されるように自らはすっかり老い衰えてしまったこと、この二つの「くすしき」という現象を指しての「けむも」という推量の表現であったのではないかと考えられる。

この歌を皮切りに、麻呂は郎女に会えないことの苦しみを嘆くのであり、いわば当該歌は久しぶりに便りをする郎女に対するご機嫌うかがいの意味が強くこめられているとみられる。その意味で、「神家武毛」という表現の意図は、長らく会っていなかった相手との関係を円滑に取り持つための役割を果たしているものと思われるのである。

このように、一首の解釈が訓読の段階から大きく分かれることがあり、「かむさび」という訓読が一致しても、その解釈をめぐるさまざまな説が展開する場合がある。したがって、翻訳者がいずれのテキストや注釈書を参照したかによって、訳出される意味は大きく変わるであろう。古典文学を外国語に翻訳する際には、翻訳者の誤解や誤読であると断じる前に、いずれのテキスト・注釈書に基づいて解釈されたのかを見極めることが重要であるといえよう。

#### 4 おわりに

文学作品が他の言語に翻訳される際には、必ず何らかのテキストが底本として取り上げられる。しかし、そのテキストが唯一の原本でない限り、特に古典文学においては、その底本としたテキストが、国内においてどのような位置付けにあるかを把握しておく必要が生じるであろう。本稿第2節では、『万葉集』をその事例として、『万葉集』の写本・版本・注釈書についての位置付けを概説的に述べた。紹介できなかった諸本は多くあるが、『万葉集』を翻訳しようとする方々の一助となればと思う。

また、『万葉集』を翻訳しようとする時に、『万葉集』のテキスト内で訓読が定まっていない場合、どのテキストを参照したかによって、他言語における訳出の意味は大きく変化する。第3節では、翻訳の際に生じるこの問題について、本年度の公開シンポジウムで取り上げた522番歌を取り上げた。ここでは、「神家武毛」をいかに訓読するか、その訓読と解釈の妥当性について検討した。『万葉集』はすべて漢字によって表記されていることから、それを和語（日本語）として訓読することそのものがすでに〈翻訳〉なのであり、そこにはその歌をいかに解釈したかが反映される。このような問題は『万葉集』に限られたことではないが、他言語に翻訳されるということをとおして、新たに『万葉集』研究へと還元されてゆく問題が多く存するのではないかと思われるのである。

#### 注

- (1) 『日本古典籍書誌学辞典』（1999年、岩波書店）。
- (2) 『日本国語大辞典』第2版（2001年、小学館）。
- (3) 【図表1】は、佐佐木信綱『万葉集事典』「典籍篇」（1956年、平凡社）、『校本万葉集 1〔首巻・附巻〕』「万葉集諸本解説」（1931年、岩波書店）、桜井満編『必携万葉集要覧』（1976年、桜楓社）、坂本信幸・毛利正守編『万葉事始』（1995年、和泉書院）などを参照して作成した。
- (4) 江戸期に版本が登場した以後も写本は書写され続け、広瀬本は書写年代は江戸時代であるが、その本文・訓読の価値が研究されている。また、当館にも江戸期の写本である平仮名傍訓の『嫁入本万葉集』が所蔵されている。
- (5) 【図表3】は、佐佐木信綱『万葉集事典』「典籍篇」（1956年、平凡社）、『校本万葉集 1〔首巻・附巻〕』「万葉集註釈書の研究」（1931年、岩波書店）、桜井満編『必携万葉集要覧』（1976年、桜楓社）、坂本信幸・毛利正守編『万葉事始』（1995年、和泉書院）などを参照して作成した。
- (6) 佐佐木信綱『万葉集事典』「典籍篇」（1956年、平凡社）、『校本万葉集 1〔首巻・附巻〕』（1931年、岩波書店）などを参照。
- (7) 『校本万葉集 1〔首巻・附巻〕』「万葉集諸本解説」「万葉集註釈書の研究」（1931年、岩波書店）、『契沖全集』第1巻「解説」（1973年、岩波書店）などを参照。
- (8) 『万葉集叢書第五輯 万葉集攷証』「新刊万葉集攷証解題」（1972年、臨川書店）を参照。
- (9) 佐佐木信綱『万葉集事典』「典籍篇」（1956年、平凡社）、『校本万葉集 1〔首巻・附巻〕』（1931年、岩波書店）などを参照。
- (10) 『万葉集』の引用は中西進『万葉集 全訳注 原文付』（講談社文庫）による。以下同じ。なお、[ ]内は漢字本文を示している。
- (11) 『契沖全集』第2巻（1973年、岩波書店）。
- (12) 『万葉集古義』第3巻（1928年、名著刊行会）。
- (13) 『万葉集全釈』第1冊（1935年、広文堂）。
- (14) 『佐佐木信綱全集』第2巻（1949年、六興社）。

- (15) 武田祐吉『増訂 万葉集全註釈』第5巻（1957年、角川書店）。
- (16) 吉沢義則・石井庄司『万葉集総釈』第2巻（1935年、楽浪書院）。
- (17) 『窪田空穂全集』第14巻（1966年、角川書店）。
- (18) 日本古典全書『万葉集 1』（1947年、朝日新聞社）。
- (19) 日本古典文学大系『万葉集 1』（1957年、岩波書店）。
- (20) 中西進『万葉集 全訳注 原文付 1』（1978年、講談社文庫）。
- (21) 小島恵子「万葉集巻四・五二二番歌の『神さびけむ』について」（『創造と思考』10号、2000年3月）。
- (22) 多田一臣『万葉集全解』第2巻（2009年、筑摩書房）。
- (23) 「神家武毛」の対象を相手（坂上郎女）とする諸注釈書は、代匠記（精撰本）・万葉考・全釈・総釈・佐佐木評釈・武田全註釈などであり、作者（藤原麻呂）とする諸注釈書は日本古典全書本・日本古典文学大系本・窪田評釈・日本古典文学全集本・土屋私注・日本古典集成本・全注・講談社文庫本・新編日本古典文学全集本・釈注・和歌大系本・新日本古典文学大系本などである。また、「神家武毛」の意味を「神々しい」とする諸注釈書には佐佐木評釈・日本古典集成本・講談社文庫本・全解などがあり、「古ほけた・老いた」とする諸注釈書には、全釈・総釈・日本古典全書本・日本古典文学大系本・窪田評釈・日本古典文学全集本・土屋私注・日本古典集成本・全注・新編日本古典文学全集本・釈注・和歌大系本・新日本古典文学大系本・全歌講義などがある。
- (24) 森本健吉「万葉集の神・神さぶ考」（『文学』第2巻7号、1934年7月）。
- (25) 木下正俊『万葉集全注』第4巻（1983年、有斐閣）。
- (26) 『十三経注疏 附校勘記』上冊（江蘇広陵古籍刻印社）。
- (27) 新日本古典文学大系『続日本紀 2』（1990年、岩波書店）。